地図でたどる

舞台のクライマックスは、浜松から島田、そして大井川へ…。

写真/青木信二

文楽「生写朝顔話」。

泣けて、クスリと笑えて、
また泣ける。
すれ違いドラマの決定版！

すれ違いはドラマを生む。そして、これはすれ違いドラマの決定版だ。出会いのトキメキから、別れ、再会、また別れ…と運命の糸は交わりそうでなかなか交わらない。そんなじれったくもハラハラドキドキさせてくれる「生写朝顔話」とは、一体どんな物語なのか。

お家騒動も面白いけど、
大衆が好きなのは、
やっぱり悲恋モノ。

そもそもは司馬芝叟の長話『葬（あさがお）』を歌舞伎化し、それをさらに浄瑠璃に直したもので、もとはお家騒動の話だった。しかし、興行的には、ワキ筋にあった男女の悲恋のほうが面白そう…というわけで、現在のような仕立てになったらしい。その悲恋のいきさつを簡単に紹介したいが何しろいろんなことが起こる。しかもややこしい。そこで二人の足跡を中心に地図の上でまとめてみた。

ハラハラの展開。
それにしても
なぜ、こんなにもすれ違う？

一つは、養子に入ったり、芸名を名乗るなど、途中、主役二人の名前が変わる。それで互いに気づかぬまま、ということが起こる。もう一つは、すれ違いモノお決まりの絶妙なタイミングでのアクシデント。国元から急命が下ったり、よからぬ者を伴っていたり。風が吹いたり、川が増水したり。ヒロインは、盲目にまでなってしまう。

それでも変わらない
二人の思い。
カギは、朝顔の扇。

それでも変わらない二人の思い。カギは、朝顔の扇。考えてみれば、世の中に電話もメールもない時代、愛しい人がどこにいるのかわからない状態でニアミスの連続自体、奇跡に近い。二人をつなぐのは、ズバリ！彼が朝顔の歌をしたためた扇。物語の要所要所で登場し、まさに運命の風を送るのである。

出会ってはすれ違うのは、W主演のこの二人！

【宮城阿曽次郎（みやぎあそじろう）後に**駒沢次郎左衛門**（こまざわじろうざえもん）**】**
大内家の武士。後に伯父の養子となり、改名。これもまた、すれ違いの理由の一つ。

【深雪（みゆき）後に**朝顔**（あさがお）**】**
家老 秋月弓之助の娘。流浪の果てに盲目となり、朝顔を名乗る。

【浅香（あさか）】深雪の乳母。深雪を守り、深手を負って亡くなる。
【戎屋徳右衛門（えびすやとくえもん）】浜松で笑い薬を手に入れる島田宿の主人。実は浅香の父。
【萩の祐仙（はぎのゆうせん）】深雪に横恋慕したヤブ医者。笑い薬の段ではご注目！
【 岩代多喜太（いわしろたきた）】家中の者ながら、大内家乗っ取りを企む一人。

地図の上から、二人の運命を追ってみよう！

1 大内舘の段（おおうちのやかた）
遊興に耽る主君を諫めるため、駒沢了庵は甥で跡継ぎの宮城阿曽次郎を鎌倉に使わす。

2 多々羅浜の段（たたらはま）
浜の松原で勘当の身を嘆く、了庵の実子祥一郎。物陰から老女の策略を聞き、後を追う。

3 宇治川蛍狩りの段（うじがわほたるがり）
蛍狩りに出かけた阿曽次郎。詠んだ短冊が風で秋月弓之助の娘、深雪の舟に舞い、二人は出会う。阿曽次郎は朝顔が描かれた扇に歌を詠む。やがて急命にて舟を去る。

4 真葛が原茶店の段（まくずがはらちゃみせ）
深雪に横恋慕する医者の萩の祐仙。二人の縁談を知り、阿曽次郎に化けようと画策。

5 岡崎隠れ家の段（おかざきかくれが）
偽装がバレた祐仙は深雪の父に追い払われる。再会が叶わず、深雪は落胆。そこへ国元（広島）からのお召しで、一家は帰郷の途に。本物の阿曽次郎が深雪を尋ねるも門前払いされる。

6 明石船別れの段（あかしふなわかれ）【兵庫】
明石の港。天候不良により停泊中の舟で深雪は琴を弾き、朝顔の歌を唄う。それを聴き驚いたのは、同じく風待ちの阿曽次郎。再会を喜び合う二人。懇願に負け、阿曽次郎は深雪を連れて行く決心をする。深雪が書き置きを残すために家族の舟に戻った途端、急に風が起こり、舟は出港。慌てて深雪は朝顔の扇を彼の舟に投げ込む。

7 弓之助屋舗の段（ゆみのすけやしき）
深雪の父が縁談を持ち帰る。相手は駒沢次郎左衛門（以下、駒沢）。阿曽次郎の改名とは知らず、絶望とともに深雪は家を出る。

8 小瀬川の段（おせがわ）
悪党から逃れた深雪は身を投げようとするも、老女（実は盗賊の一味）に助けられる。

9 摩耶が嶽の段（まやがたけ）
老女の娘らの助けを得て、深雪は盗賊が隠れ住む摩耶が嶽から逃げ出す。

10 大磯揚屋の段（おおいそあげや）
一方、鎌倉の大内公は、駒沢の諫めに我に帰る。

11 薬売りの段（くすりうり）
島田の宿屋戎屋の主人は、浜松参詣の折、怪しげな笑い薬を買い求める。その後、深雪をさらい損ねた人買いが薬売りに声をかける。

12 浜松小屋の段（はままつごや）
流浪のうちに盲目となる深雪。その深雪を探し、巡礼姿の乳母、浅香が通りかかり、涙の再会となる。そこに現われた人買いを倒す浅香は、自らも深手を負う。

13 笑い薬の段（わらいぐすり）【島田】
駒沢を始末したい祐仙は、戎屋に泊まる駒沢にしびれ薬を混ぜた薄茶を飲ませようと、駒沢と同行の岩代に持ちかける。その一部始終を見た主人は、代わりに先頃求めた笑い薬をお茶に入れ、駒沢にお茶に気をつけよと知らせる。それを聞いて怒ったのは祐仙たち。しびれ薬の解薬を持つ祐仙は、悠々と飲んでみせるも、効いたのは笑い薬だった…。

14 宿屋の段（やどや）【島田】
宿屋で駒沢は衝立の書画に朝顔の歌を見つけ、主人に尋ね、部屋に呼んでもらう。朝顔と名乗る盲目の女は、確かに深雪。そして、琴を弾き歌うのはあの歌…。だが、駒沢は岩代の前では声をかけることもできない。岩代が部屋を出た後、すぐさま会おうとするも、朝顔は出かけた後。出立の時刻が迫る駒沢は、お金と薬、扇を主人に託す。もしやと戻った朝顔は、扇に恋人の名前があることを知り、後を追う。

15 大井川の段（おおいがわ）【大井川】
雨中、深雪が大井川に急ぐも、大水で川留めに。しかし、駒沢は川を渡った後。深雪はここを三途の川と定めて死のうとするが、秋月家の関助、戎屋の主人らに助けられる。実は主人は浅香の父。娘の死を知り自害し、その血で駒沢が託した薬をその血で飲ませる。すると、深雪の目は再び開く。

16 返り咲吾妻の段（かえりざきあづま）
駒沢に会うため、深雪は道を急ぐ。